

# 伏見城跡・指月城跡

調査期間：令和6年12月2日(月)～令和7年1月10日(金)

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

## 1 発掘調査について (図1)

調査地は、JR桃山駅から南東へ300m程、大光明寺陵の北側に広がる住宅街の中に位置します。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「指月城跡」及び「伏見城跡」に含まれます。

指月城・伏見城は、豊臣秀吉が築いた城として知られています。当初は、隠居後の住まいとして文禄元年(1592)に屋敷を設けたのが始まりです(指月屋敷)。文禄3年(1594)には屋敷を拡張して天守を備えた城郭となります(指月城)。しかし、文禄5年(1596)の慶長大地震により指月城が倒壊すると、北東側

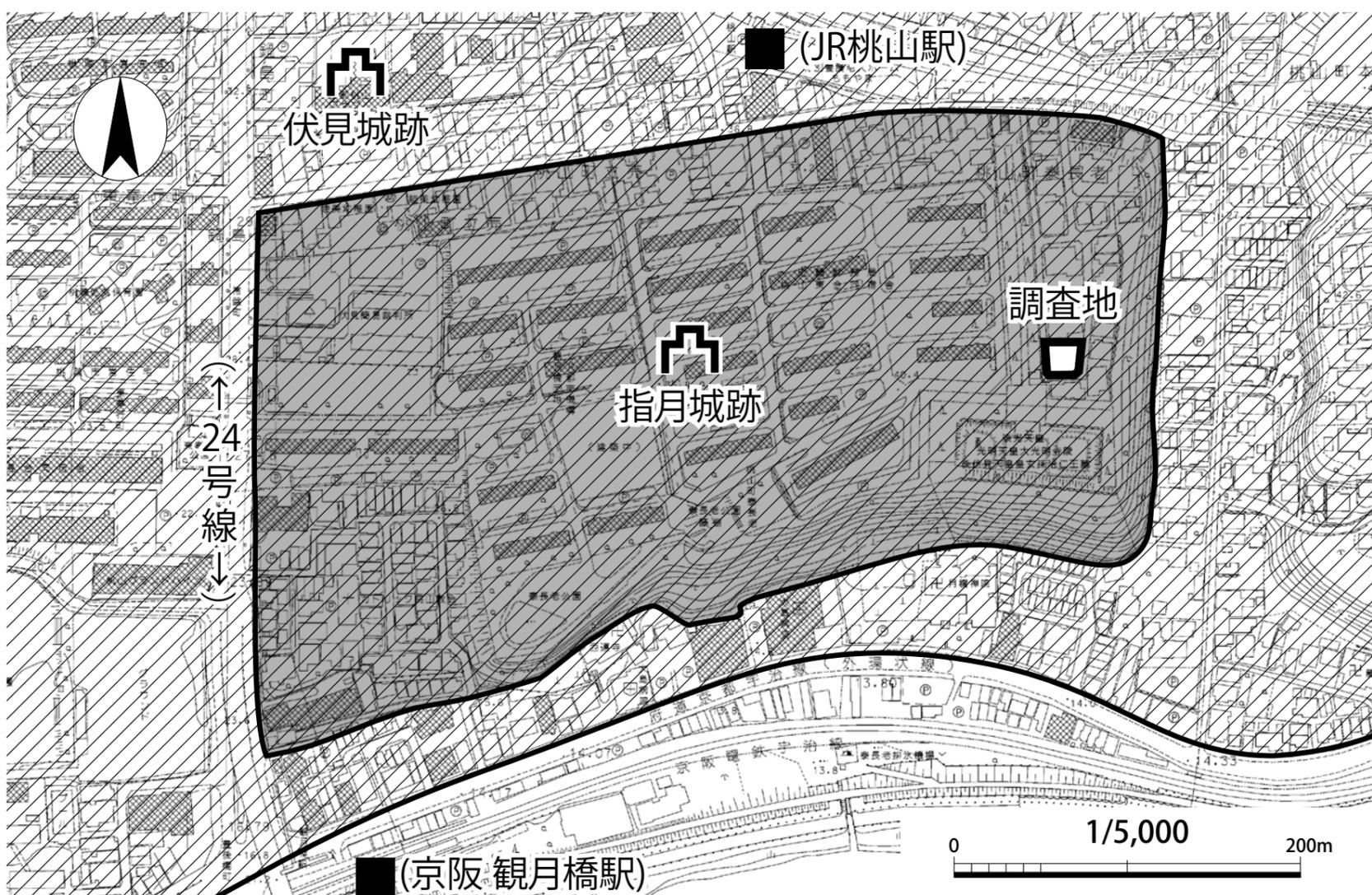


図1 調査位置図

の<sup>こはたやま</sup>木幡山に城の中枢を移します。(伏見城)。秀吉の死後は、徳川家康がここで政務をとり、関ヶ原の戦いの<sup>ぜんしょうせん</sup>前哨戦で焼亡した後は、家康が同じ場所に再建します。最終的に、元和9年(1623)に廃城となり、歴史の舞台から姿を消すこととなります。

今回、この場所で個人住宅の建て替えが計画されました。指月城跡及び伏見城跡の変遷や復元を考えるうえで重要な地点であることから、地権者の協力のもと発掘調査を実施しました。

## 2 調査地の地歴 (図2)

指月城跡は、宇治川北岸の高台に築かれた城です。現在、周辺の地形や調査成果から、南北方向の堀によって区切られた平坦面が東西方向に<sup>ひなだんじょう</sup>雛壇状に連なる<sup>れんかくしき</sup>連郭式の城と推定されています。本調査地は、指月城段階では「郭1」と呼ばれている、最も高い場所にある区画の南東部に位置します。郭1の北東隅は1段高くなっており、そこに天守台の存在が想定されています。

後に木幡山に城の天守などの中枢が移ると、指月城の跡地は大名などの有力者の屋敷地として割り当てられました。絵図等によると、本調査地には豊臣政権で顧問的役割を務めた<sup>りんざい</sup>臨濟宗の僧・<sup>さいしょうじょうたい</sup>西笑承兌の屋敷があったようです。西笑の別称である「兌長老」が、現在も「<sup>たいちょうろう</sup>泰長老」という地名として残っています。

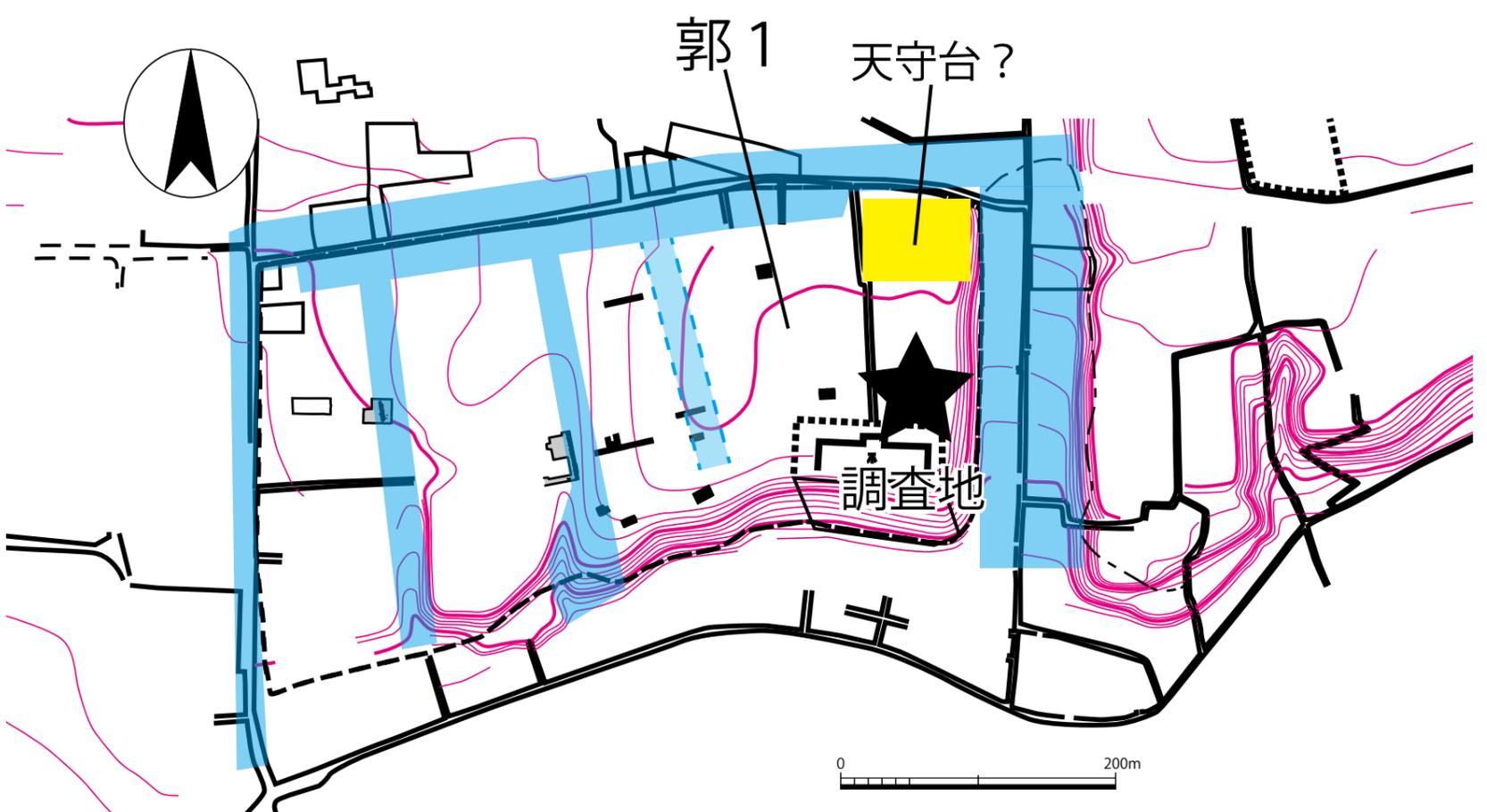


図2 縄張り復元図 (左：指月城段階)

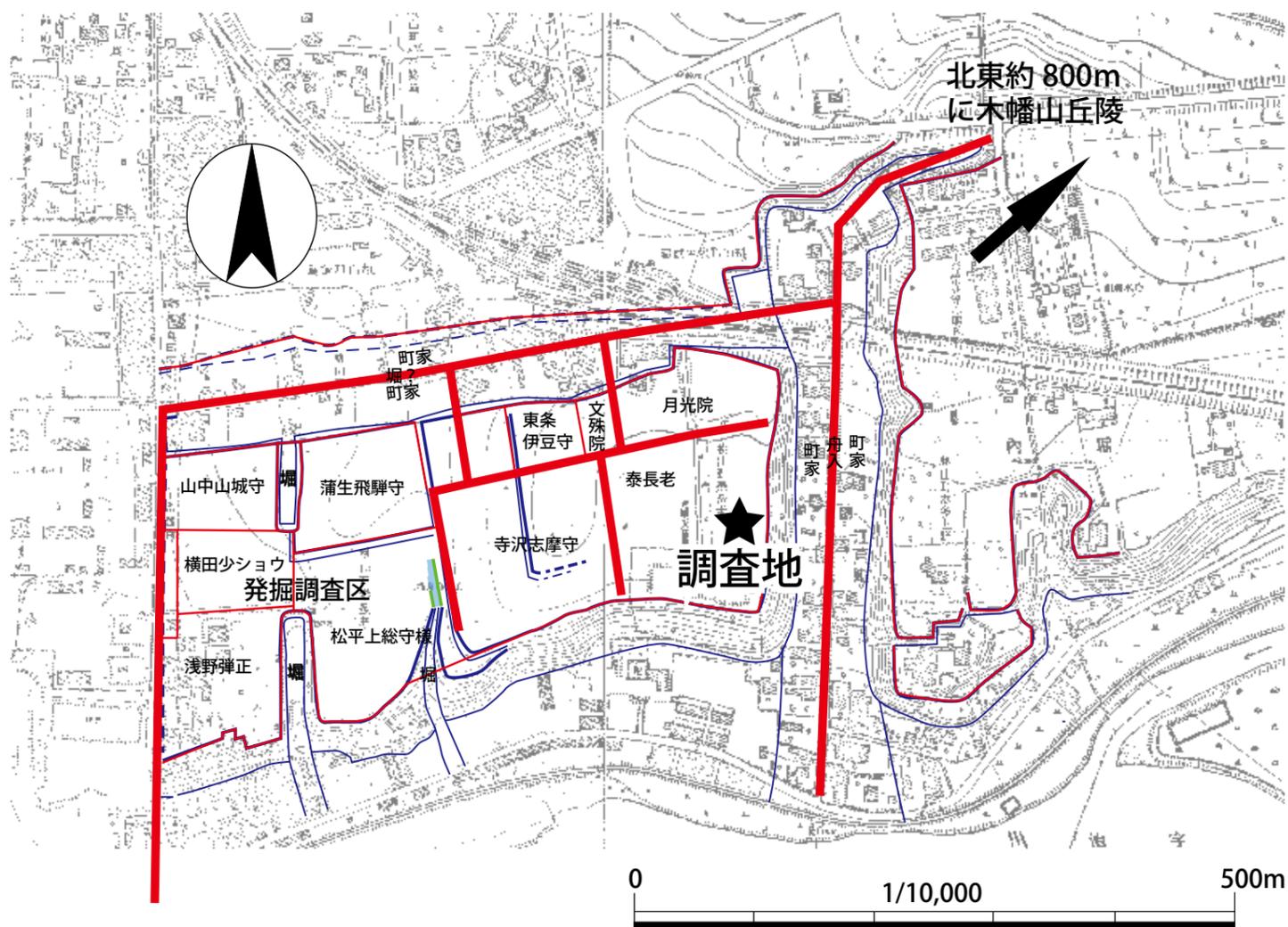


図3 縄張り復元図（左：木幡山城段階）

## 3 調査成果（図3）

敷地の西寄りに調査区を設け、適宜、拡張を行いました。遺跡は、現在の地表面から約0.8m下に残っていました。

調査の結果、安土桃山時代～近代にかけての遺構を合計37基確認しました。遺構の種類としては、ピットや溝のほか、地下式礎石や地業などがあります。遺物はコンテナ箱で3箱分出土しましたが、その大半を瓦の破片が占めています。

現在、報告書作成に向けて整理作業を行っている途中ですので、これらの遺構のうち安土桃山～江戸時代の主要なものについて概要を説明します。

### 柱列A

調査区の東側で確認した、南北方向に並ぶ5基のピットで構成されています。ピットは直径0.5m前後、深さ0.2m前後のものが多く、各ピットの間隔は1.4～1.75mです。現状、西と東側には展開しないことから、南北方向の柵などの遮蔽物の痕跡と考えられます。なお、柱材や柱の痕跡が確認できないことから、廃絶後に柱などは撤去された可能性があります。





写真1 柱列Bピット20  
瓦出土状況（北西から）

写真2 柱列Bピット23  
瓦出土状況（南東から）

## 溝22

調査区の中央で確認した、南北方向の溝です。規模は長さ南北10m以上、幅0.85m、深さ0.1mです。

## 土坑36

調査区の南辺西側の拡張部で確認した土坑です。規模は、南北0.95m以上、東西0.53m以上、深さ0.49mです。重複関係から溝22よりも古いと考えられます。ここから、小さいですが金箔瓦の破片が出土しました。

## 建物C

調査区の南東部で確認した建物で、地下式礎石15・34と土坑37で構成されます。地下式礎石は一辺1.2～1.3mの隅丸方形の掘方を有し、深さは1.1m以上もあります。底には50cm程の花崗岩が平らな面を上に向けて据えられています。地下式礎石15の断面では柱が抜き取られた痕跡が確認できます。また、礎石上面には柱に合わせるためか、直線的に加工をしていると思われる箇所が見受けられます。これらの痕跡から、柱に使用されたのは1辺が30cmほどの角材と推測されます。地下式礎石15と34の距離はおおよそ5.7m（19尺）です。土坑37については保存のために平面形の確認に留めていますが、位置・形状からこれも地下式礎石の可能性が極めて高いものです。



写真3 建物C 地下式礎石34  
(北から)



写真4 建物C 地下式礎石34  
(北西から)



写真5 建物C 地下式礎石37  
(東から)

## 地業40

調査区の北西部で確認しました。直径2.74m、深さ0.53mと比較的大きなものです。10cmほどの厚さで砂礫を水平に積んでおり、固く締まっています。建築物の基礎に伴う壺地業<sup>つぼじぎょう</sup>と考えられます。



写真6 地業40 (南から)

以上、本調査では小規模な調査面積ながら建物の痕跡や柱列・溝などの土地を区画する遺構を確認しました。特に、地下式礎石等は現在、想定されている指月城の範囲内で建物跡として判断できる初の事例です。

それでは、一体、どのような建物が建っていたのでしょうか。これは非常に興味が引かれる問題ですが、発掘調査で見つかるのは基本的に建物の基礎部分のみです。そのため、建物自体の構造が発掘調査の成果のみで判明する事例はほとんどありません。

しかし、本調査で確認した地下式礎石は、柱を乗せるだけの通常の礎石とは異なり、地中に柱を埋め込んで固定することから、より安定した構造です。この地下式礎石は1辺が1m以上、柱間は約5.7m以上もある大型のものです。また、使用された柱は1辺が30cmほどの角材と推測されます。江戸時代の天守の柱は8寸（約24cm）～1尺（約30cm）以上の角柱が使用されることが多いようです。断片的ですが、これらの情報を踏まえると、この地下式礎石は、城の中でも主要な建物や望楼などの一部である可能性を考えることが出来るかもしれません。

（熊井 亮介）